虹（にじ）

平成は続いてゆく

⑰⑤ おせっかい焼きのおかみの民宿

「民宿　平成」の看板の前に並ぶ知子さん（右）と知花子さん

ある日はタラ汁、ある日はバイ飯。さらにはゲンゲの唐揚げが登場する日もある。「民宿　平成」（黒部市）の自慢は富山ならではの海の幸を生かした家庭料理だ。

民宿は名前の通り、平成に生まれ、平成を生き抜いた。

おかみの中島知子（なかしまともこ）さん(73)が調理する。ちょっとした小鉢も全て手作りする。業者向けの調理済みの食材や冷凍食品は使わない。「楽しようと思ったらどれだけでもできるけど、したくないんですよ。意地です」。その意地が伝わっているのか、卓上に並べられた料理を残す客はほとんどいない。

洗い残しが気になるから食洗機は使わない。インターネットの宿泊予約サイトも利用しない。サイトの運営会社に手数料を払うくらいなら客に還元する。宿代を安くし、いい食材を使う。どれもこれも意地だ。

コンクリート打ちっぱなしのモダンな建物は亡き夫、毅（たけし）さんが設計・施工した。台風にも地震にもびくともしない。ただ難点もある。分厚い壁はＷｉ－Ｆｉの電波を通しにくい。「昔はインターネットなんて想像もしていなかったから」と知子さんは笑う。

◇

知子さんは毅さんと1974年（昭和49年）に23歳で結婚した。友人の集まりの中で自然と仲良くなった。毅さんはゼネコンから独立し、建設会社を営んでいた。

幸せな日常は結婚早々に一変した。夫が知人２人の連帯保証人になっており、借金を全て肩代わりさせられた。代々受け継いだ土地や財産を手放すことになった。

「時代もあったんでしょうけど、お金のことで別れようなんて思わない。ただ夫を支えないといけないという気持ちだけ」。知子さんは数十人の職人たちのまかないを用意することになった。真っ暗な午前３時からご飯を炊き、みそ汁を作った。

現場に出て、力仕事もした。ユニック車を運転し、資材を運んだ。「おかげで腕も体も太くなった。昔は細かったのに」

明るく、たくましく。一度は他人の手に渡った土地を１区画ずつ買い戻した。

借金返済のめどが立った頃、ふと思った。「自分のために時間やお金を使ってみたい」。これまでずっと夫の会社を手伝い、家族の世話をしてきた。それが嫌だったわけではないが、少しだけ自分の人生を生きてみたかった。しかし、外で勤めては、会社や家のことができない。ひらめいたのが、民宿の経営だった。料理くらいなんとかなる。

「おお、いいぞ」。毅さんに相談すると、二つ返事で了承してくれた。「ただ金は自分でどうにかしろ」と言われた。自分の名前で初めて銀行からお金を借りた。建てたのは、夫の育った家があった土地だ。夫婦２人で力を合わせて取り戻した。駅からは少し遠いが、大切な場所だった。

建物の設計と施工は、毅さんが買って出てくれた。県外の高級ホテルや寺院の建設も引き受ける腕利きだった。ちょっとした要望を伝えると、得意にしていた鉄筋コンクリートの建物を造ってくれた。建物が竣工（しゅんこう）したのは1989年１月７日。昭和最後の日だった。

「平成」という新しい元号が発表されると、ピンときた。自分の宿の名前にしようと思った。「カタカナのおしゃれな名前は覚えてもらえないし、自分らしくない。でも、元号なら絶対に忘れられないでしょう」

初めての電話がかかってくると、「平成です」と応じた。新鮮さと照れくささを感じた。新しい時代と人生が始まったのだ。

◇

最初の宿泊客は国税局の職員の団体だった。研修で３日間滞在してくれた。「段取りも決めていなかったからしっちゃかめっちゃかでしたよ」。２人の娘がまごつきながら手伝い、最終的には客も笑いながら加わってくれた。おおらかな時代だった。

大通りのあちこちに「民宿　平成」という大きな看板を立てた。多少の浮き沈みはあっても、時代は活気づいていた。周辺の開発のため、建設関係者が頻繁に利用した。経営はすぐに軌道に乗った。当初７室だった客室は12室まで増築した。42畳という宴会にも合宿にも使える広間も設けた。

自慢の手料理は長年かけて磨いた。たまに外食すれば、「味付けはどうなっているのか」と分析した。盛り付けもまねた。

宿泊者が早朝に出掛けるのなら、その時間に合わせて客より早く起きる。朝ごはんや弁当を用意するのだ。おにぎり300個作ってほしいという団体客からの突然の要望にも応じた。「断ろうと思えば断れるけど、お客さんは遠い親戚みたいなもの。まあ、おせっかい焼きなのよ」。早朝に起きて深夜に寝る。そんな毎日をずっと繰り返した。民宿の経営はビジネスではあるが、泊まってくれた人を支える使命でもあった。

長女の知花子（ちかこ）さん(47)は「母は本当に一生懸命。家族で旅行なんて行ったことはほとんどない。私が進学の相談をする暇もなかった」と振り返る。

民宿は順調だったが、毅さんの会社の経営が傾いた。知子さんが借金の保証人になった。会社を畳む際には残った借金を背負った。「嫌って言ってもどうにもならない。払わないといけないもんは払わないと」

2017年（平成29年）、夫は旅立った。肝臓がんを患っていた。経営から退いた後は、民宿の経営を手伝ってくれた。一緒に買い物にも行ってくれた。ここぞという時に的確なアドバイスもしてくれた。知子さんの人生を波乱万丈にした張本人だが、やはり一家の大黒柱だった。精神的な支柱だった。

毅さんは亡くなる間際、「何も残してやれなかった」と申し訳なさそうにつぶやいた。知花子さんが「母さんのこと心配？私たちが付いているよ」と言うと、安心するように息を引き取った。

令和になった。新しい時代に新しいことを始めてみたくなった。毅さんを失い、止まってしまった時間を動かしたかった。知花子さんのアイデアでランチを始めた。42畳の大広間で提供される知子さんの料理は子連れのママたちに好評だった。大きな空間は元気な子どもたちにとっても快適な場所だった。

◇

じわじわと襲ってきたのがコロナ禍だった。１年目はまだよかった。旅行客は減ったが、土木関係者らが泊まってくれた。しかし、２年目になると宿泊客はほぼゼロになった。ランチもやめざるをえなかった。「うちで集団感染したなんてニュースになったら、それこそ当時は大変だったでしょう」

「県民割」や「全国旅行支援」が始まったが、もともと宿泊料が安い民宿よりも、高級な宿ばかりに人々の目が向いた。時代に取り残された気がした。

客足が戻り始めたのは、今年５月の連休あたりからだ。しかし、何かが変わった。仕事で使ってくれた土木関係者の宿泊が減った。同じグループなら相部屋が当たり前という民宿ではなく、それぞれ個室のビジネスホテルを好むようになったらしい。人々の意識がコロナ禍を経て一変したのだ。

なんとか旅行客や合宿の学生の利用はあるが、経営は今ひとつだ。でも、根強いファンはいる。常連客は各地の手土産を携えてやってくる。来られなくても電話をくれる。働き詰めの人生で節くれた肉厚の手に握手を求める人もいる。知子さんは「ありがたいですよ。どんなお返しをしようか考えるだけでも張り合いになる」と感謝する。

家族や友人には「いつまでやるの」と質問される。決まって「あと10年」と答えている。去年も一昨年も同じように答えた。多分、来年もそう言う。「このままやめたって固定資産税を払わないといけないし。だったらやるしかないでしょう」と冗談めかす。

平成は終わったが、平成は続いてゆく。

「紅葉賀」西治子

取材のため「民宿　平成」には何度も訪ねました。インタビューを終えて帰るたびに、知子さんと知花子さんの２人が駐車場で手を振って見送ってくれました。いつも宿泊客の皆さんにやっていることだそうです。照れくさいけど、温かい気持ちになりました。泊まったわけでもないのに「また来よう」と思いました。

「虹」第８巻 販売中

最新刊の第８巻「虹　誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は12月１日（金）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局